

目次

第Ⅰ部 幕間劇 一九六三年

7

第Ⅱ部 アーノルト・ターズ 一九五三年

35

第Ⅲ部 フィリップ・ターズ 一九七三年

135

訳者あとがき

242

儀 式

ほくよりも寛容な人間というのは基本的に存在しないだろう。どんな意見にも、それを弁護できる理由がある。ほく自身があいまいな意見を持っているわけではないけれど、ほくとまったく対照的な環境で育った人が、対照的な意見を持つようになることは理解できるのだ。

(スタンダール、ある記事の草稿より、一八三二年)

第I部 幕間劇 一九六三年

あらゆる計画に際して、「こんな馬鹿げた計画が何になる？」という疑問が浮かんできてしまう。その問いが、ぼくの考えのすべてを支配しようと迫ってくるのだ。

(テオドーア・フォンターネ)

インニ・ウイントロップが自殺を図った日、フィリップスの株は一四九ギルダー六〇だった。アムステルダム銀行は終値を三七五につけ、ユニー海運は一四一・五〇に下がった。思い出というのは、横になりたい場所で勝手に寝転ぶ犬のようだ。そもそもインニが何かを覚えているとしたら、次のようなことだ。株式市況。月が運河を照らしていたこと。そして自分がトイレで首を吊ったこと。なぜって彼は、「ヘット・パロール」紙の星占いの欄で、妻がよその男と駆け落ちし、獅子座の男——彼自身がそうだったが——は自殺を図る、と予言したのだ。予言は的中した。ジータはイタリア人の男と家出し、インニは自殺を図った。その前にブルームの詩も読んだはずだが、どの詩だったかは思い出せない。わがままな動物である思い出という犬は、この点ではまったく役に立たないのだ。

その六年前、彼はまさしくあのプリンセン運河に面した裁判所の階段の上で、結婚式の前夜に泣いたのだったが、それはジータがヴァレリウス通りにある蛙や虫けらがいっぱい部屋で彼女を奪われたときに流したのと同じ、本物の涙だった。泣いた理由はおんなじだった。暗い予感と、単なる記号や式典によってであれ、自分の人生において何かを変えることへの名づけようのない不安があったのだ。

彼はジータを非常に愛していた。彼はこっそり、自分の家のなかでだけ、ジータをナミビアの王女と呼んでいた。なんといっても彼女は緑の目と輝くような赤い髪と柔らかいバラ色の肌をしていて、それはすべてナミビアの貴族の特徴だったのだ。おまけに彼女は、不審の念を表すとき

にも静かで控えめだったが、それはナミビアのあらゆる地域で貴族の真の美德とされていることだった。ジータはインニが彼女を愛する以上に彼を愛していたかもしれない。うまくいかなかったのは、インニが自分自身を愛していなかったからなのだ。もちろん、二人があんなに馬鹿げた名前を持つていたせいでと主張する人々もある。しかしインニ（有名なイギリスの建築家からとったイニゴが本名だった）もジータ（ナミビアの王女の母親はハプスブルク家のファンだった）も、異国風の名前が自分たちを世間の人々から際立たせ、そこから遠ざけるということを知っていた。だからこそ、ベッドにいるあいだじゅうずっと、インニ、インニ、ジータ、ジータと囁きかわすことができたのだ。特別な機会には、ピロードのように柔らかなバリエーションも生まれた。ジンニとか、イータ、イニジータ、ジンニニータ、そしてイチジータ。名前と体の組み合わせを好きだけやってよいのなら、彼らは永遠に続けることができただろう。だが、時間の総体とその反動的な断片ほど仲の悪いものはない。というわけで、彼らも永遠にベッドにいることはできなかった。

インニ・ウイントロップはいまではもう禿げかけていたが、この時代にしては個性的な長さの金髪をもじやもじやと生やしていた。そして、夜を一人で過ごせないという点と、少しばかり金があり、ときおり幻覚を見るところで、同世代の多くの人々とは違っていった。さらに彼は絵画も商っており、「ヘット・パロール」に星占いを書き、オランダ文学のたくさん詩を暗記し

ており、株と先物取引の状況を毎日細かくチェックしていた。政治的信条に関しては、それがどちらの方向に向かうものであろうと、多かれ少なかれ感情疾患の穏やかな形式だとみなしていた。世間のなかでインニは自分のために、イタリア語の字義通りの趣味人ディレクタントの位置を確保していた。周囲の人々からは矛盾とみなされていたこれらすべてのことは、六〇年代が進むにつれ、アムステルダムではますます痛みを伴うようになった。「インニは二つの世界で生きてるからね」と彼の友人たちは言うのだった。友人たちには多種多様な人々がいたが、彼らは一つの世界にしか住んでいなかった。一日のどんな時間帯でも——お望みなら命令一下で——自分を憎む準備のあったインニは、友人たちのなかでは例外的存在だった。その気になれば、自分を無能者とみなすことさえできただろう。しかしインニにはその気はなく、人生を一つのクラブのように見なしていた。そのクラブはいささか奇妙な印象を与えるもので、人は偶然そこに加入しただけであり、理由を言わずにいつでも自分の名をメンバーのリストから消すことができるのだった。集まりがあまりに退屈になったらクラブから脱退しようと、彼はすでに決心していた。

だが、退屈とはいったいどのくらいの退屈を指すのだろうか？　しばしば、もうその時点が来ているように思えた。そんなときインニは何日間も床に寝そべり、中国製の葦のござの、ちくちくする織り目に頭を押しつけていたので、かなり柔らかな肌の上にはチェス盤のような模様がついてしまった。ジータはそれを耽溺と呼んだが、純粹な魂の苦悩が目に見えない深い泉からあふれ

出しているのだとわかっていた。そんなどんよりした日には、ジータはインニにできる限り優しくしてやった。耽溺はたいい幻覚で終わった。そうなるとインニは葦のござの拷問から身を起し、ジータをそばに呼んで、たったいま現れた幻の姿を描写し、彼らがどんな振る舞いをしたかを語るのだった。

インニが裁判所の階段で泣いたあの夜から、何年もが過ぎた。ジータとインニは食事をし、酒を飲み、旅行をした。インニはニッケルの相場で金を失い、デン・ハーグ派の水彩画で金をもうけた。星占いを書き、「エレガンス」という雑誌のために料理のレシピを書いた。ジータはもう少しで子どもを産むところだった。しかし今回は変化に対するインニの不安が抑えがたくなり、結局のところ彼にとっておもしろいことができないうな、こんな世の中には子どもを産み落とさないよう、ジータに命じた。だが、それによって彼は、自分にとっての最大の変化、つまりジータが出ていくという変化を、確実にしてしまったのだ。インニはそのことについて、最初の翳りにしか気づいていなかった。ジータの肌は乾燥し、ときおり目は彼を素通りし、前ほど頻繁に彼の名を呼ぶこともなくなった。しかし彼はこうした兆候を彼女自身の運命とだけ結びつけており、自分の運命とは結びつけて考えなかったのだ。

後になると分離不可能などっしりした塊のように見え、たった一つの匂いと味しかしない料理

のようにこぢんまりとしてくるのが、時間というものの特性である。現代詩の表現に通じたインニはこのころの自分を「一つの穴」、すなわちそこにいない人間、存在しない人物と呼んだ。詩人たちと違って、その表現で何か重要なことを言ったわけではない。むしろそれは、自分が多種多様な人々と付き合う才能があるという事実についての、社交的なコメントだった。一つの穴、カメレオン、態度とか発音とか、彼にとつてはどうでもいいようなことを何でも組み込むことのできる人間。アムステルダムは、擬態に関してはあらゆる可能性を提供していた。「きみは生きてないよ」と作家をやっている友人が一度言ったことがある。「きみは気晴らしをしているだけだ」インニはそれを褒め言葉だと思った。彼は株主総会でも街角の居酒屋でも、自分の役をうまく演じることができると思った。ときおり問題になるのは髪型と服装だけだ。しかしこの頃になってアムステルダム中がカメレオンっぽくなり、服装に関しては世界に先駆けて階級のない社会が告知され、誰がいつどこで何を着ようが関係なくなってしまうと、インニは彼の実存における最も幸福な時代を経験した。そもそも彼の人生におけるそんな時代について語れるとしたら、の話だが。

ジータの場合はちがっていた。見通すことができないほど広いナミビアの保護区でさえ、枯渇してしまふことがあるのだ。あまりにも貞節なために、たった一度の不貞で、確実な悲劇から抜け出せてしまう女性たちというのがいるものだ。インニにもそのことは予測できたのかもしれない。しかし、もう見いだせない時間の、分割不能な塊のどこかで、彼はジータに気を配るのをや

めてしまった。もつと悪いことには、不幸の影や先触れがあったにもかかわらず、次第にジータを忘れていきながらも、ますます頻繁に彼女とセックスだけはしていたのだ。そのためにジータは、ゆっくりとではあるが完全に、どんどん変人になっていくこの夫への愛を引き上げてしまった。夫は彼女を求め、撫でまわし、舐め、悶絶させたりはしたが、ときには何日間も彼女の存在に気づかないのだった。こうしてインニとジータは二つの完結した快楽機械となった。見た目は美しく、町の飾りであり、ハファイ・カイザーやディック・ホルトハウスらのパーティーでは夢のカップルとみなされていた。しかし、一人きりのときには、ジータは好んで子ども用品のショーウィンドウの前に立ち止まるのだった。そして秘かな復讐心に身震いするのだったが、それはたいてい——そんなことを見ることができるのは、すべてを保存する観念的な大電子計算機だけだが——インニがヨーロッパのどこかの首都のいかがわしい飲み屋で、売春婦や鋌を打ったジーンズをはいたティーンエイジャーの男に看病されているときか、どこかのゲームセンターで立て続けに六回「バンコ！(バカラのゲームで銀行役を相手に賭ける際のかけ声)」と叫んで奇襲作戦を成功させているときだった。ショーウィンドウの前の、赤毛に縁取られた白い女性の顔に現れた肉食系の欲望にひきつけられ、そろそろと近づいてくる南国の男に、ジータはまだ注目していなかった。彼女のときはまだ来ていなかったのだ。

それはプロヴォオ運動(六〇年代半ばに起こったウンターカルチャーの運動)の前のアムステルダムで、暴徒たちが現れる前、長

くて暑い夏の前のことだった。魔法がかかっているような半円形の都市のいろいろな場所で、不穏な気配が濃くなってきていた。オランダ領インドがオランダ史の最後の方のページで消えてから、すでに長い年月がたっているように思えた。しかもそれは将来、まったく新しく書き換えられなければならないページだった。朝鮮は一本の線で二分されていたが、多くの人が歴史上の不可欠な流れと呼ぶものによって分割されてしまったのだった。ベトナムでも紛争の種が芽を出すだろうと予測している人々がすでにいた。以前だったらあり得なかったような物質のせいで魚が死に始め、路上でますます長くなっていく車の列のなかの顔はフラストレーションと攻撃性の混交を示していたが、そのことがやがて七〇年代を特別な時代にしていくのだった。しかし、万物の母である自然がまもなく人とともに歩むのをやめるだろうということ、腐敗した時代の終わりがとても近いところがあり、しかも今回は最終的な終わりがやってくるということに気づいている人は、ほとんどいないように見えた。

しかし、こうした外面的な無知の下で、不穏や絶望、悪意の火が秘かにくすぶっていた。世界はもうずいぶん前から悪臭を漂わせていたし、アムステルダムも次第に煙を上げ始めた。ただ、誰もがそれを自分の不機嫌や悩み、解消できない結婚や、金がないことのせいにしてきた。悪がまず世界を、それから住民の何人かを襲うだろうという大いなる啓示は、まだ誰にも告知されていなかった。

「ますますどんよりと目を覚ます」というのがインニのこの頃の言い回しだった。いつが彼にと

つての夜なのか、完全に明らかになることはなかった。彼は絶えず真夜中に目を覚ましては、死ぬ——少なくとも彼の言い方ではそうなのだった。臨終の床にある人が、ほんの短い時間のあいだに、走馬灯のごとく全生涯が眼前に流れるのを見る、というのは有名な話だ。それがインニには毎晩のように起こるのだった。ただ、インニは何も見なかった。というのも、テレエおぼさんが現れる日までの生涯については、ほとんど思い出すことができなかつたからだ。インニの目の前を流れていくのは灰色のフィルムで、ときおり一連の映像が現れたが、そのなかではインニは——幼い頃か、もしくは少し大きくなっていて——小さく支離滅裂な場面を演じていた。あまりつながりのないできごとや、彼の記憶のがらんとした物置部屋に理由もわからず残っていた品の物の、動きのない映像なども出てきた。たとえば、ティルブルフでの卵のつた皿とか、デン・ハーグのスケンクカード通りのトイレでたまたま隣に立った男の、巨大な紫がかつたペニスとか。それなのにどうしてたくさんの詩が暗唱できるのかは、彼自身にも謎だった。ひよつとしたら自分の人生もつと暗記できたかもしれないのに、という思いをしばしば抱いた。そうしたら、毎晩くりかえされる臨終の時間に、関連性のないバラバラの断片とかではなく、少なくともまとめた映像を見ることができたはずだった。終わつたばかりの人生について、それくらいは期待しても許されるはずだ。この日々の死が限りなく不愉快だったのは、誰も死んでいないからかもしれない。そこにはせいぜい二、三枚の、けつして誰も見ることがなさそうな、ほとんどつながりのないスナップ写真があるだけだった。これらの変更不可能な、容赦のない、常に同じで意味不

明なイメージの連なりは、昼間のあいだはそれほど気にならなかった。結局のところ、死というのはそこまで生活の一部ではないからだ。インニはそういうわけで、ジータや他の誰かとそれについて話すことも避けていた。ジータは前史的なナミビアの眠りを眠っていた。夜ごとの苦しみの時間が訪れると、インニは彼女のしつかりとした抱擁から身をもぎ離し、別の部屋に行つて激しく短時間だけ泣いた。その後でまたベッドに入ると、まるで彼を見ているかのように、再び彼女の腕が開いた。それはまるで、腕以上のもの、新鮮な牧草の生えた暖かくて柔らかい草地で一杯の楽園が、広がっていくようだった。そして世界中のインニたちは、そのなかで眠りにつくのだ。

インニの記憶の欠落が、他の人たちにも伝染したかのようだった。インニの意見では、それ以外の説明はつかなかった。後になつて誰も、本当に誰ひとりとして、一九六三年の夏がどんなふうだったか言うことができなかつたのだ。夏が話題になるとときには、それがどの夏であろうと、インニはいつもドールン近郊のアーノルト・ターズの家の周りの森のことを考えた。暑い日で、すべてが少し霞みがかつていて、少し蒸し暑い。まもなく雷雨が始まりそうだ。沼は黒く、死んだように静かで、あらゆるものを水面に映そうとしている。アヒルたちは物憂げに葦の茂みのなかでうずくまっている。別荘の屋根からはクジャクの雄が絶望の叫びを上げる。ひよつとしたらもうすぐ、ついに全宇宙が滅亡するのかもしれない。早くも少しばかり腐敗臭がしてくる。いま

【著者紹介】

Cees Nooteboom [セース・ノーテボーム]

1933年、オランダ、デン・ハーグに生まれ。1955年に『フィリップとよその人々』で作家デビュー。以来50年にわたって作家、ジャーナリスト・翻訳家として活躍している。ドイツのゲーテ賞や、オーストリアのヨーロッパ文学賞など、ヨーロッパ各地の文学賞を受賞。作品の邦訳には『これから話す物語』（新潮社、鴻巣友季子訳）、『木犀！/日本紀行』（論創社、松永美穂訳）がある。

【訳者紹介】

松永美穂 [まつなが・みほ]

早稲田大学文学学術院教授。翻訳にベルンハルト・シュリンク『朗読者』（新潮社）、インゲボルク・バツハマン『三十歳』（岩波書店）、マレーネ・シュトレールヴィッツ『ワイキキビーチ』（論創社）、セース・ノーテボーム『木犀！/日本紀行』（論創社）など。毎日出版文化賞特別賞受賞（2000年）。

儀 式

2017年5月15日 初版第1刷印刷

2017年5月25日 初版第1刷発行

著 者 セース・ノーテボーム

訳 者 松永美穂

装 幀 奥定泰之

発行所 論 創 社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル
電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1564-0

落丁・乱丁本はお取り替えいたします